

冊子『引き裂かれた青春』

山野井孝有・著

真相を広める会・編

第二回

「スパイ」とされた

宮澤弘幸

はじめに

「ザクザクザク……」。時々靴音を思い出す。それは山に向かう若者たちの登山靴の音ではない。65年前の少年時代に聞いた軍靴の音だ。

当時、登山を楽しむ若者たちの登山靴は軍靴に履き替えさせられ、ピッケルを持つべき手には銃を握らせられ、山の頂きへではなく戦場へと向わせられた。そして多くの山好きな若者たちがいのちを奪われ、再び登山靴を履き、ピッケルを握ることはなかった。

先の戦争でいのちを奪われた登山家は多い。西本武志・日本勤労者山岳連盟会長の著書『十五年戦争下の登山―研究ノート』には、戦争でいのちを奪われた登山家30



左から妹・美江子、父・雄也、宮澤弘幸、弟・晃、母・とく
＝1938年1月

0人が記録されている。

本号から、西本さんの著書には名前が記録されていないが、山が好きだった一人の若者の「奪われたいのち」を書く。

その若者とは、「スパイ」とされた北海道帝国大学の学生・宮澤弘幸（検挙当時22歳）

である。

戦後、治安維持法で投獄されていた人たちは終戦を境に逆転し、「英雄」として迎えられた。しかし「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」は、戦後もずっと知られることなくきた。それは終戦のどさくさに官憲自身が捜査記録等的一切を廃棄・隠滅したことによるが、もう一つの理由は家族らが固く口を閉ざしてきたからだ。

宮澤弘幸は「スパイ」にされたままであり、弘幸の父・母・弟は「スパイの家族」の汚名を着せられたまま亡くなり、唯一人残された妹は86歳の今も「スパイの家族」のままアメリカ・コロラド州ボルダー市に暮らしている。

その、宮澤弘幸の妹である秋間美江子さんが「スパイ」の汚名を晴らしてほしいと、事件後40余年にして立ち上がった。

再び登山靴を軍靴に、ピッケルを銃にさせられる時代にさせないために、この連載を読むみなさんも一緒に考えて欲しい。

開戦の日、問答無用の検挙

1941（昭和16）年12月8日の朝7

時、ラジオの臨時ニュースは日本と米英の開戦を報じた。

この同じ日に北海道帝国大学工学部2年目・宮澤弘幸(22歳)は、旧内務省指揮の一斉検挙によって、師である北大予科英語教師のアメリカ人ハロルド・レーン(49歳)夫妻らと共に「スパイ嫌疑」で検挙されたのである。

当時の北大では、外国人教師と学生の課外交流が盛んだった。北大構内にあった外国人教師用官舎に住むレーン宅などに学生や教師が集まり、登山や旅行の話などを外国語で楽しく語り合っていた。

宮澤弘幸もその一人だった。宮澤は優秀な学生で、公募論文「大陸一貫鉄道論」を発表、さらに「満鉄電化論」の執筆を準備していた時期でもあった。日本軍による南京大虐殺を報じる海外の新聞報道を聞かされても「天皇陛下の軍隊がこんな残虐なことをするはずがない。全部デマだ」と受け付けようとしなかった。どちらかと言えば、この時代の風を受けた愛国青年であり、海軍技術将校を目指していた。

一斉検挙ではレーン夫妻らのほか同家のお手伝いだった石上茂子までも検挙された。宮澤弘幸とハロルド・レーンは懲役15年、妻ポーリンは同12年の判決を受けた。上告したが大審院で刑が確定し服役した。

石上茂子は、宮澤ら三人が起訴される直

前まで勾留され、厳しい尋問の後、釈放された。レーン夫妻は1943(昭和18)年9月の第二次日米交換船でアメリカに送還された。

戦後1951年(昭和26年)レーン夫妻は再来日し、北大で教え、札幌の土となった。1960(昭和35)年ハロルド・レーンは国際平和・日米友好関係の促進への貢献に対し勲五等瑞宝章が贈られた。レーン夫妻は、事実上の名誉回復がなされたと言える。

宮澤弘幸は懲役15年で収監

宮澤弘幸の公判は1942(昭和17)年の夏の終わり頃、札幌地裁で始まった。検事は無期懲役を求刑し、地裁は暮れの12月に、懲役15年の刑を言い渡した。宮澤弘幸は上告したが、大審院は戦時特例法を盾に書面審理だけで上告を棄却し、懲役15年の重刑が確定した。

1943(昭和18)年6月、宮澤弘幸は網走刑務所に収監された。護送を知った宮澤の母・とくは東京から急遽札幌に行つて同じ車両に乗り、離れたところから息子を見守った。当時、札幌から網走までは長時間かかった。列車が止まると母親は列車の窓から熱いお茶を買った。出来れば息子にひと口でも飲ませたいの思いがあったからだ。だが叶わなかった。たったひと身

体に気をつけて」と声をかけることも許されなかった。

宮澤弘幸は網走刑務所の独房に閉じ込められた。一度入れられたら、ほとんど外に出ることはない。看守以外とは顔を合わせることさえ滅多にない。山に挑み、各地を飛び回っていた好奇心旺盛な宮澤にとって、それがどんな日々だったか、体よりも先に心が壊されていた。

食べるものも「米4麦6」の割合の主食が半分ちかく大豆混じりに変わった。副食は塩と漬物だけだった。冬は零下20度、30度になることもあった。この網走で宮澤弘幸は冬を二度過ごした。

こんな状態におかれた息子に「一目でも会いたい、背中をさすってやりたい、激励したい」と思い続けていた母・とくは月に一度、それもたった3分間の面会のために東京―網走を往復した。

テレビや映画での囚人との面会場面では互いの顔が見え、話すことができるように透明の仕切り面に細かい穴があいている。

だが当時は小さな枠しかなく、目だけしか見えず、言葉をかけることもできなかった。

小さな枠から見える息子の目だけを見て、息子が生きていることを確かめるだけだった。それでも母は網走に通った。妹・美江子さんも母と何度か一緒した。

終戦…衰弱しきって釈放

酷寒と粗食の網走刑務所での二年間の獄中生活で衰弱しきった宮澤弘幸は、1945（昭和20）年6月になって仙台の宮城刑務所へ移され、8月15日の終戦を迎えた。だが政治犯、思想犯は敗戦と同時に釈放されたのではなかった。宮澤らが釈放されたのは2か月後に近い10月10日で、GHQ（連合国軍総司令部）による超法規的処置によるものだった。

弾圧・冤罪の根拠となった「軍機保護法」等が廃棄されたのは、その3日後の10月13日、「治安維持法」は、さらに2日後の15日だった。ドイツでもイタリアでも政治犯はただちに解放されていた。

治安維持法で収監されていた人たちは、終戦を境に「犯罪者から英雄」に逆転した。だから刑務所を出る時には大勢の万歳で迎えられた。

宮澤弘幸を出迎えたのは、両親だけだった。宮澤と家族には「逆転」はなく、なおも宮澤弘幸は「スパイ」のままであり、家族は「スパイの家族」だった。戦後68年が経った今も妹・美江子さんは「スパイの家族」なのだ。

刑務所から出る時、母・とくが息子・弘幸に履かせようと思つて持参した靴は骨と皮だけの足には履けなかった。

美江子さんは、1987（昭和62）年、自民党が国会に再上程しようとしていた「国家秘密法」に反対する運動の集会で次のように訴えた。

「兄が刑務所から出てきた時は本当に薄い人間でした。草履も履けませんでした。親指と人指し指が痛くて履けないので、母は自分のお腰巻を切つて足の指に巻いたと言っていました。その頃わたしは女学校の教師をしていました。学校から帰ると、母に言われて兄の寝ている部屋に行くと、寝床に寝かされていた兄は頭と顔はありましたが、身体がないのです。それはべちゃんこの布団でした。足を見ると踵からつま先まで二本の骨だけでした」

「あなた方に」お子さんがいらつしやいますか。何人のお父さんがいらつしやいますか、あなた方のお子さんがそんなになつたらどうなりますか。皆さんのお兄さんがそうならどうしますか。皆さんの弟さんがそうならどうしますか。今自民党政府は『国家秘密法』を再上程しようとしています。これが通れば再び私たちの家族が味わった悲しい苦しいことが起きます。わたしの力は小さいです。『国家秘密法』に反対する力を持っているのは皆さんです。スパイという名の市民の犠牲を出してはならないのです」

宮澤弘幸は、刑務所を出てから1年半後

の1947（昭和22）年2月22日、他界した。

取調べ中の拷問と零下20度、食べ物も満足に与えられない刑務所で衰弱し、やがて結核を患い、登山靴ではなく藁草履を、ピッケルではなく病身を支える杖を握り、死が迫る中で「北海道で何があつたのかをあらわに書いて、出版する」と言っていたが、ついにペンを握ることは果たせず、27歳の若さで、いのちを失った。正確には「いのちを奪われた」のだ。

私と「宮澤事件」との出会い

ここで、私がなぜ「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」と関わっているかについて記しておきたい。

1985（昭和60）年、私の息子・山野井泰史がアメリカ・ロッキー山脈での登山中に転落し、コロラド州ボルダー市の病院に搬送された。

その病院でボランティアをしていた秋間美江子さんが「英語を十分に話せない日本の青年が事故で搬入されたので来てくれ」と呼び出された。

秋間さんは、親身に泰史の面倒をみてくれ、「泰史は自分の身内のような気がする」といつて好感を持ってくれた。こうした縁で、私の一家と秋間美江子さんと夫・浩さんとの家族ぐるみの付き合いが始まった。

秋間美江子さんは秋間浩さんと結婚し、1965（昭和40）年からアメリカ・コロラド州に住んでいたが、初め、秋間美江子さんは兄・宮澤弘幸がスパイとして検挙・投獄されたことを口にするのではなく、私もまったく知らなかった。

1985（昭和60）年6月、通常国会の会期末になって、自民党の伊藤宗一郎議員ら10人が議員立法で国家秘密法を上程したが野党の反対で継続審議となった。同年12月の臨時国会でも野党が審議拒否を貫き、国会閉会とともに廃案となった。

しかし自民党は1986（昭和61）年になっても引き続き同法の再上程を企てていた。そのさなかの9月、所用で日本に来ていた秋間浩さんは、上田誠吉弁護士の著書「戦争と国家秘密法」と、10月から朝日新聞に連載された記事「スパイ防止ってなんだ」を読んで感銘を受け、帰ってから妻・美江子さんに日本の政治情勢を話した。そして、秋間浩さんは、宮澤弘幸が「スパイ」として不当に断罪されたことを、11月9日付の手紙で上田誠吉弁護士宛に書き、この事件をさらに深く解明して欲しいと訴えた。

その4か月後の1987（昭和62）年3月、浩さんの説得に応えた秋間美江子さんは東京で開かれた「国家秘密法に反対する女性達の集い」の壇上に立ち、5分間で、

兄・弘幸が検挙された日のこと、「スパイにされた者と家族の悲しい苦しみの人生」を語った。

兄・弘幸が検挙されてから45年後、家族による初めての公の場での発言だった。この年、秋間美江子さんはアメリカと日本を何回も往復し、全国各地を回った。当時、私が勤務していた毎日新聞社の大会議室で開かれた毎日新聞労働組合の集会でも100人を前に、「再び悲劇を繰り返さないため、マスコミのみなさん頑張ってください」と訴えた。

このような多くの人たちの危機感を持った行動の成果によって、国家秘密法案は再上程されることなく、鳴りをひそめるに至った。

宮澤弘幸の名誉回復を

それから25年が過ぎた2012（平成24）年秋、来日した秋間美江子さんは私の自宅にきて、思いつめた表情で「これまで71年間、『スパイの家族』として生きてきたが、私も85歳、兄・弘幸が遺したアルバムを北海道大学に寄贈して区切りをつけた」と涙を流しながら語った。

同年10月24日、秋間美江子さんは北海道大学を訪ねて、アルバムを寄贈した。同行した私は「秋間美江子さんの本音は、兄・宮澤弘幸さんの退学を撤回し、名誉を回復

して欲しいということだ」と補足し、北大に強く申し入れた。

この模様は当日のNHKニュースや翌日の北海道、朝日、毎日の各新聞が大きく報道した。

報道によって、秋間美江子さんのアルバム寄贈に込められた宮澤弘幸の名誉回復を願う気持ちを知った私の友人たちは、黙っていは「スパイ冤罪事件」の真相は広げられないし、北海道大学も名誉回復には応じないだろうと受け止め、組織的な活動を展開しようとして立ち上がった。

こうして2013（平成25）年1月29日に、札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」が結成され、北海道大学に宮澤弘幸の名誉回復等をはかるよう申し入れた。

以後、回答を引きのばしていた北海道大学は、5月27日付で「故・宮澤弘幸氏に係る件について」と題した「回答書」を「真相広める会」に送付してきた。しかし内容は、退学願、復学願等に関する新たに見つかった資料の提示だけであり、秋間美江子さんと「真相広める会」が求めている名誉回復に関する処置については一言もない。引き続き「真相広める会」の所期の目的実現に向かって、運動を展開していく方針である。

第二画

「スパイの家族」

——苦悩の日々

北海道帝国大学の学生・宮澤弘幸は1941年（昭和16）12月8日、太平洋戦争開戦と同時に襲った特高警察による一斉検挙で捕らわれ、スパイの嫌疑による拷問を受け、否認したが懲役15年の刑で極寒の網走刑務所に投獄された。

だが犠牲者は宮澤弘幸だけではない。家族もまた犠牲者だ。「スパイは国賊」の時代だったのだ。宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんは、スパイの家族の苦しみの始まりを次のように書いている。

兄・弘幸が逮捕（検挙）されたことは、知り合いの北海道通信局長から電話で知らされた。電話は「弘幸さんが逮捕された」それだけで切れた。

それから数日後、東京・代々木の家に突然目つきの鋭い男たちが現れた。家には私（14歳）と17歳の慶応大（予科）生徒の兄・晃の二人だけだった。両親は兄・弘幸が「逮捕された」と聞いて札幌

に出かけ留守だった。

私は足がすくんだ。男たちは無言で机や押し入れから物をつかみ、投げた。屋根裏に何か隠してはいないかと棒で天井を突っついて壊した。後に彼らが特別高等警察（特高）の刑事だったと聞いた。

この日から宮澤弘幸の妹・美江子さんも特高の尾行がついた。登下校や買い物時も常に「黒い影」が美江子さんにつきまとうた。

それを友達や近所の人に気づかれてはいけなさと息を殺しながら暮らした。女学生らしい明るさもこの時から消えた。

妹・美江子さんは母親と共に何度か網走刑務所を訪れるために学校を休んだ。

先生に聞かれても「風邪で」と言っておまかしていたが、先生は「ずる休み」と見ていたようだ。「兄がスパイで刑務所にいる」との本当の理由は言えないからだ。校庭に立たされたことも何度もあった。

母は兄よりも苦しかった

秋間美江子さんは「厳しい拷問と刑務所での虐待を受けた兄・弘幸は苦しかったと思う。しかし一番苦しかったのは母だった」といつている。

この時代、どこの家庭でも、夫、息子、兄弟らの誰かを戦場に送りだしていた。

だからスパイは国賊だった。「スパイの家族」は「国賊の家族」と言われ「殺されかねない雰囲気」だった。

ひっそりと暮らしていてもうわさはどこからか広がり、逃げるように引越しを繰り返した。

銃後活動に人一倍励む

宮澤弘幸の母親・とく（当時48歳）は息子の検挙・勾留・投獄を知られまいとして、戦時体制を銃後で支える「大日本婦人会」の活動に、人一倍熱心に励んでいた。

「息子がスパイの濡れ衣で網走刑務所の獄中にいる」とは言えない母親・とくは、「支那（中国）か、南方の戦場に行っている」とごまかしていた。時には戦場の名を間違えてしまうこともあった。

母親・とくと妹・美江子は網走刑務所へ何度も足を運んだ。新幹線のない時代であり、網走への往復には時間とお金を使った。蓄えはどんどん減っていった。

何軒かあった家作も手放した。母親・とくの実家からはかなりの生活援助があったが、生活ぶりは厳しく、それ以上に厳しかったのは世間の目だった。

母親・とくは「美江子、絶対に落してはいけないよ」と美江子さんに日本酒の一瓶二本を持たせ、息子が服役する網走刑務所をたびたび訪れた。

当時は日本酒など中々手に入らない時代だ。息子の待遇を少しでも良くしてほしいとの母親の気持ちからだ。うわさで「看守に渡すと良い」と聞いていたからだ。

しかし、その効果はなかったようだ。ゴザに座らせられていた息子を小窓から見つけた時、母は「弘ちゃんは生きている」といつて涙を流して喜んだ。

「スパイ」の母・とくは、もう一人の息子・晃にも先立たれ、大きな支えであった夫も1956年(昭和31)4月14日、65歳で亡くし、悲しく厳しい老後生活を送った。

母親・とくは、しばらくは日本で一人で暮らしていたが、その後、80歳の時、ボルダールで研究生活を送る秋間浩・美江子夫婦のもとで一緒に暮らした。しかし、まわりがすべてアメリカ人の環境は、お年寄りには無理だった。

母親・とくは日本に帰国した。しかし年老いた母を一人にしてはおけないと思った秋間美江子さんは、ボルダールから遠くなく、日本人が大勢住むデンバーに、母親・とくの新たな生活の場を見つけた。

美江子さんが暮らすボルダールとは車で1時間の距離で、在米仏教会の建てたアパートで暮らすことになった。入居者は全員日本人。そこで長唄、裁縫などを教えて、「東京のご隠居さん」と親しまれていたが、息子・弘幸を忘れることはなかった。

当時81歳のとくは、29年前のあの日を思い、宮澤弘幸の命日に次のような手記を書いている。

宮澤とくの手記から(原文)

2月18日でした。付添の五十嵐看護婦さんが、一寸お母さんと呼んできてくれ、との事で私が二階へ行きベッドのそばへ行きましたらパッチリ目をあき、お母アさん、もう三日したら起きられるようになるから、と話しかけられ、私を喜ばせてくれましたが、私はうしろをむいて涙をふきました。

かわゆそうでかわゆそうでたまりませんでした。そうして二言、三言話をしてまたすやすやとねむってしまったが、それが最後の話となり、とうとう昭和22年2月22日午後二時前後でした。

父、母、晃、美江子、昭子、看護婦の五十嵐さん結城さん、などに見まもられて、29歳(注、数え年)を一期に長い旅立ちをしてしまひました。一しきり皆の泣き声がやむはづごさいませんでした。

ついつい三十余年たつてもきのふの如く此の悲しみはわすれませぬ。お父さんもうとうとう嫁ももたせず、かわゆそうな事をしたと、男泣きにすがって泣いて居ました。ほんとうによい子でした。弘ちゃん、ごめんさい。

1976年2月22日

デンバーでは、宮澤とくの人柄から多くの話し相手が出来た。

とくは日本ではなく、アメリカで初めて心を落ち着ける場を得たようだった。そして、デンバーで亡くなった。87歳だった。息子・宮澤弘幸がスパイ嫌疑で検挙されたから39年間の長い間「スパイ」の母親として苦しんだ宮澤とくの最期が、日本ではなくデンバーの地であったことは、幸せであつたかもしれない。

妹・美江子の苦悩と結婚

宮澤兄妹の母親・とくの実家は横浜の商家で、比較的裕福だった。宮澤雄也と結婚してからも経済的援助は欠かさなかつた。

そんな生まれ育ちの母親であつたが、日本の女性として恥ずかしくないようにと、礼儀作法は美江子さんにもしつかりと教えていた。美江子さんのびのびと明るい女学生として成長していった。

しかし兄・宮澤弘幸が検挙されてから妹・美江子さんの人生は大きく変わった。兄の検挙を境に「スパイの家族」としての人生が始まった。両親留守の自宅に特高警察が踏み込み、学校への登下校にまで特高の黒い影が付きまといつた。そのうえ「スパイの家族」は戦後も続い

た。世間はまだ宮澤一家を「スパイだった」と白い目で見た。年頃を迎えた美江子さんは肩身の狭い生活を送っていた。

美江子さんには、結婚話がいくつもあつた。結婚となれば兄のことは隠しておけないと「スパイ容疑で網走刑務所に収容されている」と話すと、相手からは「この話はなかったことに」と言われた。「母は、わたしが兄のことでお嫁にもいけないことをすごく心配していた」と、何度も語った。

そんな美江子さんに手を伸べたのが、東大を卒業し、工学博士となった秋間浩さんだった。

1950年（昭和25）、美江子さんは母・とくと北海道を旅行した。兄を偲んで網走刑務所の門前に立った時、わずか3分の面会時間のために東京から何度も訪れて、この門をくぐったことを思い起こして、母と二人で涙を浮かべた。

兄を偲ぶ北海道の旅だったが、美江子さんの「マリモを見たい」と言う希望で阿寒湖に行った。

そこで偶然出会ったのが当時の文部省電波物理研究所に勤務し、北海道で観測の仕事を終えて阿寒湖に来ていた秋間浩さんだった。

それがきっかけとなって交際が始まり、「スパイの家族」であることをすべて承知の上で、「美江子さんは私が守る」と言っ

結婚した。

秋間浩さんとの出会いで、美江子さんの人生に光があたった。阿寒湖での出会いは偶然であり劇的だったが、それはきっと妹を思う兄が二人を引き合わせてくれたのだと、妹・美江子さんは今も思っている。

結婚して10年が過ぎた1965年（昭和40）、秋間浩さんは研究の場をアメリカ・コロラド州ボルダー市に移した。日本での業績がアメリカ商務省に認められて決断した。

そして秋間浩さんと妻・美江子さんは二人の子供とともにアメリカ永住を決意した。浩さんは、ボルダーの研究所でも研究活動を続け、数々の成果を上げている。

秋間浩さんは、結婚した後妻・美江子さんの心のどこかに「スパイの家族」の引け目があるのを感じていた。アメリカに研究活動の場を移したのも、そんな美江子さんを気づかっただけで、理由の一つだったのかも知れない。

前号で紹介したように、秋間浩さんは「スパイの家族」としての苦しみを抱き続けていた妻・美江子さんに、1987年（昭和62）に自民党が「国家秘密法案」再上程を策動する中、「美江子が口を閉ざしてはまた同じ悲劇が繰り返される」といって日本に送りだした。

秋間美江子さんを支え続けた秋間浩さん

は16年前デンバーで亡くなった。

多くの日本人を支えた美江子

86歳になる秋間美江子さんはアメリカ・コロラド州ボルダー市で病院、養老院などでのボランティア活動を50年にわたって続けている。

そして1000人にもものぼる多くの日本の若者たちに自宅を開放してきている。

「なぜこのように大勢の若者の面倒をみるのですか」と聞いたことがある。「勉強好きな兄があのようなことで亡くなった。だから頑張る若者には手をかしてやりたい。浩さんも黙って給料から若者の食事代をだしてくれていた」と答えた。

ボルダーの秋間家で世話になった若者たちの中には、後に政財界で大物となった名前もある。

その中の一人に「オブちゃん」がいた。1987（昭和62）年の秋、外務省主催の海外日系人集會に参加した秋間美江子さんに、一人のさえない男が「秋間のおばさん」と声をかけた。美江子さんには見覚えのない顔だった。外務省の役人に「あのひとだあれ」と聞くと「小渕外務大臣です」と言った。

秋間宅に世話になった政財界の大物たちは、秋間美江子さんが「スパイの妹」として苦しんできたことを知らない。「オブちゃん

ん」もだ。

若者の一人である私の息子・泰史は、大怪我をして面倒をみてもらった時の縁で、クライミングでアメリカを訪れる時はコロラド・ボルダーの秋間宅を何度も訪れた。

2002年(平成14)、息子・泰史と、泰史の妻・妙子が「植村直己冒険賞」を受賞した時も、自分の子供が受賞した事のように喜び、がんの手術後だったにもかかわらず痛み止めを飲みながらコロラドから授賞式に臨んでくれた。

「兄は山登りが大好きだった。それがスパイの汚名を着せられ、命を奪われ、二度と山に登ることができなかった。だから、泰史の受賞は嬉しい」と言ってくれた。

もう一人の兄の悲劇

秋間美江子さんの、もう一人の兄で、宮澤弘幸の弟・晃(あきら)について書いておきたい。

1943(昭和18)年10月21日、明治神宮競技場で、時の東條英機首相が閲兵し、出陣学徒壮行大会が行われた。

前日の朝日新聞朝刊は「慶応大学経済学部一年宮澤晃君は高らかに壮行の辞をのべる」との予告記事を掲載した。宮澤家では、弘幸のスパイ事件があつて日蔭の生活を送っていただけにことのほか喜んでいた。しかし、壮行大会の当日の朝日新聞

の夕刊には別の学生の名前が載って、宮澤晃の名はなかった。晃は家族に何も言わなかった。

晃は、兄が「スパイ」で検挙されていることが知れ、急遽交代させられたのだった。妹・美江子さんは、このことを晃の死後、知人からの話で知った。そして何も語らないで苦しみを胸に秘めていた兄を思っ泣いた。

晃はその後、慶応大学から海軍航空隊に学徒志願し、戦闘機のパイロットになった。1945年(昭和20)8月9日、長崎に原爆が投下されたとき、被害状況を調査するための飛行で、放射能に汚染された上空を何回も飛んだ。

終戦直後、晃は海軍の命令でアメリカ占領軍総司令官マッカーサーが厚木飛行場に降り立った時の通訳の一員に加えられた。復員後は父親が勤めていた藤倉電線に就職していたが、その後三井物産に転職して結婚したが、1964年(昭和39)白血病のため40歳で亡くなった。

当時はまだ放射能と白血病との関係は明らかにはされていなかったが、原爆投下直後の長崎の上空を何度も飛んだことによる放射能被曝が原因だと言える。

次兄・晃も長兄・弘幸と共に若くして戦争の犠牲になった。妹の美江子さんは戦争で二人の兄を亡くしたのだ。

今またこの悲劇が繰り返されようとしてゐる。登山を楽しめるのは平和だからだ。

「私たちのような悲しみと苦しみは二度と繰り返さないでください、日本の皆さん、平和を大事にしてください」――。

86歳の秋間美江子さんは、アメリカ・コロラド州ボルダー市で、心から願っている。

第三回

レーン夫妻と一女性の

苦難

前号までは北海道帝国大学の学生・宮澤弘幸とその家族の苦しみと悲しみを書いた。今回は、一斉検挙で宮澤と同じ日に検挙された同大学予科の英語教師だったレーン夫妻とその家族の苦難について書く。

さらに宮澤弘幸の恋人であつたある女性のことを紹介する。戦争につながる「スパイ冤罪事件」は、本人・家族だけに止まらず、事件とは直接のかかわりのない若い一人の女性の人生をも奪ったのだ。

軍役忌避の敬虔なクエーカー教徒

「スパイ冤罪事件」の非道が及んだのは宮澤弘幸と家族、そして日本人だけではな



かった。特高警察を動員しての一斉検挙によって宮澤弘幸らと共に獄に繋がれることになったレイン夫妻Ⅱ夫のハロルド懲役15年、妻のポーリン同12年Ⅱの苦難を紹介する。

夫ハロルド・メシー・レインは1892（明治25）年10月7日、アメリカ・アイオワ州タマで生まれ、キリスト教・クエーカー教団の建てたカレッジに学び、卒業した。

1917（大正6）年4月、アメリカ合衆国は第一次世界大戦に参戦し、選抜徴兵法が施行された。

神の戒律を守るクエーカー教徒として、いかなる理由、事情があつたとしても人が

人を殺すことは許されないし、加担もできない。

合衆国はそうした国民の居ることをふまえ「良心に基づく兵役拒否」の制度を設けていたので、ハロルドはこの制度によって、所定の社会奉仕を行うことで兵役を忌避した。

第一次大戦後、日本政府が大学教師を公募していることを知り、応募した。その赴任地が北大だった。のちに父ヘンリーも呼び寄せた。

札幌へ赴任後、住まいとして居候した先が、キリスト教の宣教師であるジョージ・ミラー・ローランドの住む宣教師館だった。やがて妻となるポーリンの父親である。

妻ポーリン・ローランド・システア・レインは1892（明治25）年12月7日、京都で生まれた。父ジョージはイギリス国教会に対立する組合教会派の宣教師で、各地を巡り、札幌では1896（明治29）年から伝道に努めていた。

ポーリンは同志社大学で学び、結婚し一女に恵まれたが、ほどなく夫は第一次世界大戦で戦死した。このため傷心の身を札幌の両親の元に移し、伝道を手伝っていた。

ポーリンは日本語が堪能だった。京都で生まれただけでなく、日本語での伝道を行ってきた。日常会話も日本語で暮らしてきた。

この習慣は、ハロルドと結婚（1922年Ⅱ大正11）したあとも引き継がれ、その子供たち（最初の夫・ウイリアムとの子をはじめ6人の娘たち）も日本語で育てている。

ハロルドもポーリンも温和で信仰心に篤く、隣人の困るのを放っておけない性格だった。

北大の外国人教師用官舎で一軒おいて隣に住んでいたイタリア人の北大医学部助手フオスコ・マライーニは「レイン家を訪問する人々は、『文化』を求めてというよりは、夫妻の素晴らしく温かい歓待と、あらゆる年齢、性別、階級、国籍、宗教、職業の人々に対する思いやりのある態度、そして総じて人間性に対する二人の深い理解に惹かれて訪れたのであった」と、ある友人の追悼集で回想している。

一言でいえば、聞き上手だったのだろう。信仰や信条をはじめ己を強く持ちながら、他人に押しつけることはなかった。

だから「心の会」（第一回参照）においても、会員たちは、立場によって分かれがちな時局からむ出来事を話題にすることはなかった。

それは「用心に越したことはない」という共通の意識が働いていたこともあったのだろうが、もっと深いところでの人材の育成を意識していたからだと思える。

看守も一目のポーリン

1941（昭和16）年12月8日、太平洋戦争開戦の日、特高は一斉検挙によってレーン夫妻とお手伝いの石上茂子を捕らえた。レーン夫妻の手元には当時11歳の双子の娘ドロシーとキャサリンがいた。二人が学校から帰っても両親は居なかった。双子の娘は米国の親族に送り届けられることになり、1942（昭和17）年6月、最初の日米交換船で海を渡った。

日本生まれの二人は英語があまり話せなかった。アメリカ人を両親にもつ二人なら当然英語を話せると思われるが、レーン夫妻は日本を自分の生涯の地と定めていたため北大生らと話すときには英語だったが、家庭では多く日本語を使っていた。

アメリカでの二人は初め英語があまり話せないため、いじめにも合ったようだ。

刑が確定し収監されていたレーン夫妻は1943（昭和18）年9月、二度目で最後の日米交換船でアメリカへ送還された。先に帰国してニューヨーク港で出迎えた娘たちは、白髪で衰弱した両親の余りに変わり果てた姿を見て気を失ったという。

ポーリンが勾留されていた大通拘留所で、一時一緒だった内田ヒデ牧師（小樽で検挙）は、看守たちから「あの方（ポーリン）はとても立派な人でした。ただスパイという

ことで警戒しただけで、人間としてなら、私らは及びません」と聞いたという。

このような人柄のレーン夫妻がスパイであったとは到底考えられないのである。

戦後、再び北海道大学へ

1950（昭和25）年の秋ごろ、北大ではハロルド・レーンをもう一度、英語教師として招こうとの声が上がった。戦後5年しか経っていない時点でそういう声が上がったという事は、レーン夫妻が、英語を教えるだけの先生ではなかったことの証明であるといえよう。

この話を聞いた夫妻は、札幌に残した友情がよみがえろうとしていることを心から喜んだという。

こうしてハロルドは1951（昭和26）年4月、北大英語教師として戻った。夫妻は船で横浜に着くと、しばらくの間、東京に滞在し、弔意の花束を手に東京の宮澤家を訪ねた。

だが、宮澤弘幸の両親は花束を拒んだ。両親は息子が有罪にされたのはレーン夫妻が罪を着せるようなことをしゃべったからだと強く思っていたからだ。

その後、上田誠吉弁護士の調査の中で、レーン夫妻が全公判を通してスパイ嫌疑を全面否認していたことがわかった。

後日、宮澤弘幸の妹・美江子さんは、レ

ーン夫妻が眠る札幌・円山の墓前で両親の非を詫びた。

再来日したレーン夫妻は「スパイ冤罪事件」については、ほとんど語ることはなかったが、妻のポーリンは「ただけエピソードを語った。

「拘留所で洗濯係を命じられていた時、私は見覚えのある夫のシャツを見つけた。夫は生きていると直感した。そして、私も生きているわ」と知らせるために、自分の頭髮を夫のボタンにからめて戻した」と。

北大教師としてのハロルド・レーンは1960年（昭和35）に長年の英語教育の発展と国際平和・日米友好関係の促進に貢献したとして「勲五等瑞宝章」を授章された。

ハロルド・レーンは1963年（昭和38）8月7日、腸の手術中の医療事故で亡くなった。70歳だった。

「レーン先生御夫妻謝恩記念事業会」が募った基金を基に「レーン記念奨学金」が設立され、英語の成績が優秀でレーン夫妻の理想にふさわしい学生に奨学金が与えられ、現在も続けられている。

妻ポーリンは1966（昭和41）年7月16日、夫の後を追って亡くなった。73歳だった。

レーン夫妻の「スパイ」としての判決はいまも確定したままだ。大審院判決は、再審請求して無罪を勝ち取らない限り、その

罪は消えることはない。

また北海道大学が、自校の教師が「スパイ」として検挙・懲役にされた冤罪に関して、大学としてとった大学らしからぬ対応を謝罪し、同じ非道を二度と起こさせない決意を表明したとも聞いていない。

しかし北大が戦後再び英語教師として迎え、死後もレーンの名前を記した奨学金制度を維持し、日本政府がレーンの業績を讃えて叙勲したと言うことは、事実上の名誉回復を為したと評価してよいと、私は思っている。

レーン夫妻は今、天国で、教え子・宮澤弘幸が今もって「スパイ」と断罪されたままであり、北海道大学が明確に謝罪していないこと、86歳の妹・秋間美江子さんが、アメリカ・コロラド州で、兄・弘幸の冤罪が晴れることを一日千秋の思いで待っていることをどう思っているだろうか。



「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」の代表・幹事ら6人は、今年（2013年||平成25）年6月25日、三上隆・北海道大学副学長と会い、本会の「申入書」に対する回答と、宮澤弘幸に関する再調査結果の説明を受けた。

同副学長は、再調査の結果については詳しく説明したが、宮澤弘幸に対する大学としてとった誤った対応への謝罪と北大とし

ての総括については明言を避けた。

しかし、「宮澤事件を風化させない」ことを約束し、「このような悲劇を繰り返さないため、二度と戦争を起こさせない」ことでは一致した。

翌26日午前、有志で、札幌市の円山墓地にあるレーン夫妻のお墓にお参りした。

繁る夏草に囲まれた墓碑に花を供え、「スパイ冤罪事件の真相を広め、二度と起こさせないための私たちの歩みは遅いが、この歩みを止めることは決してない」と報告し、北海道大学OBである山本玉樹・本会代表と刈谷純一幹事が、北大寮歌「都ぞ弥生」一番を熱唱、献歌した。

同じ日の午後、札幌市内で開いた「真相を広める会」の拡大幹事会では、いまもレーン夫妻を知る北大OBから、宮澤弘幸とともに、レーン夫妻の苦難の真相を合わせて広め、かつ顕彰していくべきだとの強い意見が出された。

引き裂かれた愛

宮澤弘幸には、高橋あや子（1924年||大正13||3月15日生）という恋人がいた。

高橋あや子は医師を目指し、東京女子医専への進学を考えていた。父は警察官で、北海道・小樽の水上警察署の署長だったが、在任中に病死した。父の病死で高橋あや子

の家の生活は苦しくなっていた。

宮澤弘幸は高橋家の近くに下宿していた。二人のきっかけは、高橋家の人たちもアイヌ民族に対する関心を持っていたことを宮澤弘幸が知ったことによる。

高橋あや子は結局、東京女子医専への進学をあきらめ、北大医学部に設けられた臨時医学専門学校を目指すことになり、宮澤弘幸が高橋あや子の受験勉強をみることになった。いまで言う家庭教師だった。

1941（昭和16）年春頃から二人は急速に親しくなった。

宮澤弘幸が高橋あや子を友人に紹介する時「この人は私の大事な人です」と言うのを聞いて、あや子は弘幸の強い愛情を感じとっていた。

宮澤弘幸はこのころ海軍の委託学生の試験に合格し、一カ月45円の手当をもらうようになった。北大卒業後は海軍の技術将校になる道を考えていた。そして正式に海軍に入隊したら結婚するつもりでいた。

宮澤弘幸の母親・とくはこの年の11月に、札幌に来て、弘幸と共に高橋家を訪れた時、高橋あや子に赤いしぼりの帯どめを贈った。宮澤弘幸が特高に睨まれていることは、札幌警察署の山浦署長からの注意で知られていた。山浦署長は高橋あや子の父が水上

警察署長の時の部下であったことから何かと、高橋家のことに関心を持っていた。11

月に入ってから再度山浦署長から注意があった。

12月4日、高橋あや子は腎盂炎で高熱を出し北大医学部の付属病院に入院した。12月7日、宮澤弘幸は何も知らずに高橋宅を訪れてあや子の入院を知らされた。

宮澤弘幸はその日の午後高橋あや子を見舞った。白い封筒を取り出し氷枕の下に差し込んで、「お金が入っている。翻訳で僕がかせいだ綺麗なお金だから安心して使ってね」と言いつて病室を出て行った。

その時のことをあや子は「なぜかあの時の弘幸さんの後姿はさびしげだった」と語っている。封筒には70円入っていた。

宮澤弘幸が一斉検挙で特高に捕らわれたのは高橋あや子を見舞った翌日だった。

その後、弘幸の両親は北大総長に救いを求めたが聞いてもらえなかった。北大生・宮澤弘幸の受難にあまりにも冷淡な北大に、母親・とくは高橋あや子の母親・マサと手を取り合つて泣いた。

高橋あや子が退院したのは12月末だった。宮澤弘幸が特高に検挙された時、あや子の母親・マサは、あや子に「弘幸さんのことをどう思っているの」と聞いた。これに、あや子は「考えていない」と答え、マサを驚かせた。

宮澤弘幸の刑が確定して網走刑務所に送られ、親族だけに面会が許されることにな

った時、高橋あや子は「形だけでもよいから入籍させてほしい。妻として面会でできれば翌日には籍を抜いてもよいから」と母親・マサに詰め寄ったが、母親は取り合わなかった。

宮澤弘幸が宮城刑務所を出て1年経った1946（昭和21）年の9月、宮澤弘幸から高橋あや子の母・マサ宛てに毛筆の手紙が届いた。

戦後、高橋あや子と家族は宮澤家を探したが、当時の東京は焼け野原であり、そして宮澤家は「スパイの家族」を隠して転々と住まいを替えていたため、探し当てることが出来ないでいた。

宮澤弘幸からの手紙は「今は病気で療養中だが、社会復帰できるように努力していきます」との簡単な内容だった。

高橋あや子との再会を望んでいたことは間違いない。しかし宮澤弘幸はあや子に会うことなく、1947（昭和22）年2月22日に27歳の若さで亡くなった。このとき、あや子は23歳だった。

独身で通した生涯

高橋あや子には、何回も結婚話があったが、宮澤弘幸を忘れることが出来ず独身を通した。弘幸の学生服を着た写真を財布に入れていたが、盗難に遭つてその写真も失った。

高橋あや子は1955（昭和30）年、30歳の時、札幌の地を去った。

1987（昭和62）年12月、62歳になった高橋あや子は、新聞広告で『ある北大生の受難』（上田誠吉弁護士著）を見て購読した。宮澤弘幸の苦難の人生が書かれていた。

高橋あや子は上田弁護士に「これからも国家秘密法反対の運動を続けてください。第二の弘幸さんを出さないためにそして言論の自由を守るために」と手紙を書いた。

1988（昭和63）年1月10日、仙台のハリスト正教の教会で上田誠吉弁護士は、高橋あや子、照子の姉妹に会い、二人の長い長い苦難の話聞いた。

2011（平成23）年5月、東日本震災被災者に医療支援活動をするアメリカの医師団20人の通訳として秋間美江子さんは宮城県気仙沼にいた。あまりの寒さに耐えられず、仙台の高橋あや子を訪ねてセーターなどを譲つて貰った。

2013（平成25）年3月、秋間美江子さんから私に「高橋あや子さんが2月に亡くなった」と電話があった。89歳の生涯を独身で通した高橋あや子の最期について、妹の照子さんは「肺がんと分かってから1週間、亡くなる10日前には姉妹で温泉に行った」と語った。その照子さんも2014年に亡くなった。

先の戦争で300万人のいのちが奪われた。だが奪われたいのちの数倍、数十倍も人間が、生きて悲しく辛い思いをした。それが戦争なのだ。

第四回

フォスコ・マライーニと 宮澤弘幸

2013（平成25）年の夏は異常気象だった。

日本列島は猛暑に加えて大雨で大きな被害が出た。一方、福島原発事故現場の放射能汚染水漏れが連日報道されている。震災・猛暑・大雨は天災だが、原発事故は人災だ。

ところが内閣総理大臣・安倍晋三は、天災対策を手抜きする一方で、最悪の人災だった「原発」の再稼働を企み、外国へのセールスにも忙しい。ブレイキの効かない欠陥車を外国に売ろうとしているのと同じではないのか。

さらに昨年12月の総選挙で過半数を取った自民党の安倍政権は、国防軍を保持し集団自衛権行使を目指して、憲法改悪を公

然と掲げ、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の元凶であった「軍機保護法」を「特定秘密保護法」と改称して制定しようとする動きを強め、再び戦争への道に踏み出そうとしている。

この安倍政権の「異常」を見逃すならば再び「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」が起きる。

私は戦争を体験し、宮澤弘幸らの悲劇を身近に感じてきた者として、この「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」を一人でも多くの人々に知って欲しいとの決意を込めて、この連載を続けたいと思う。

今回は、北海道帝国大学で宮澤弘幸の7歳上の岳友であり、戦後、宮澤の家族以外でたった一人だけ宮澤に会って激励したイタリア人フォスコ・マライーニと宮澤弘幸の交友と苦しみを紹介する。

その前に一つだけ、お断りしておく。宮澤弘幸とマライーニは登山が共通項だ。だから登山についても書かねばならない。

まして本誌は登山専門誌だ。そして私は息子・山野井泰史が中学から登山を始めてから今日まで、息子の命の先にある登山と常に向き合ってきた。だから私は決して登山に無関係ではない。

しかし私は登山自体への知識はない。三年前に、山へ登る息子・泰史と向き合った30数年間を書いた『いのち五分五分』（山

と溪谷社）を出版したが、その時、泰史から「親父は登山を知らないのだから、登山に関することは書くな」と言われた。

その通りである。だからここでは山登りが大好きだった戦争犠牲者である二人の友情を紹介する。

師弟・岳友だった二人

フォスコ・マライーニは、1912（大正1）年11月15日、彫刻家の父と小説家の母の長男としてイタリア・フィレンツェで生まれた。

登山家・文化人類学者・日本研究者・写真家として多くの実績を残している。

マライーニは、1938（昭和13）年、国際学友会の奨学金を受けて北海道帝国大学医学部の助手（無給）として妻子と共に来日した。その頃の様子について、マライーニは、ビデオ「レーン・宮澤事件」も一つ一つの12月8日」の中で次のように語っている。

「北大でアイヌの研究をするために札幌に着いた。レーンさんがホテルに来て、初めて会った。とても親切な夫婦だった。クリスマス2日前、レーンさんのおかげで4軒ある大学官舎の一つに入った。となりは反ヒトラー、反ナチのヘルマン・ヘッカー、アメリカのレーン夫妻、ドイツのドクター・クレムプで、近くにフランス人の太

黒マチルド夫人がいた。この国際的に面白いグループが中心になって、1939（昭和14）年6月、太黒マチルド夫人宅で『心の会』が発足した。一週間に一回、レーンさんの家かヘツカーさんの家か私たちの家に集まった。一年半くらい続いた。宮澤弘幸は初めから参加していた」

この時期に先立つ1937（昭和12）年7月、日本軍は盧溝橋事件を機に中国侵略戦争に突入し、泥沼化させ、政府は1938（昭和13）年4月には国家総動員法を公布して、国民を戦争体制に組み込んでいった。そんな時代が背景にあっても、好奇心旺盛な宮澤弘幸と7歳年長のマライーニは、登山に、アイヌ研究にと交流を深めていった。

次に、記録に残っている活動を記してみる。

1940（昭和15）年2月の『北海道タイムス』（『北海道新聞』の前身の一つ）に、フォスコ・マライーニと宮澤弘幸連名による「雪小屋（イグルー）実験手記」が連載△マライーニと自転車で北海道の中央部から南部を旅行（日高・二風谷のアイヌ集落など訪問）△9月、マライーニと日本北アルプス穂高・槍に登る。

宮澤弘幸はこの時期からマライーニが京都大学のイタリア語教師に転ずる1941（昭和16）年4月までの半年間、マライー

ニの借家（北大構内の官舎からの移転先）に居候していた。

イタリア降伏で敵国人に

京都で、宮澤弘幸の検挙を知ったマライーニは、宮澤の無実を固く信じ、宮澤と冬山登山で愛用していた寝袋を留置場に差し入れるため北大時代の共通の友人に頼んだ。

マライーニの祖国イタリアは、ドイツ、日本とで「三国同盟」を締結していた。だから英米系の外国人教師が教職を追われる中で、イタリア人マライーニは日本の大学で教壇に立つことが許された。

しかし、実際には既に特高は同盟国人であっても「外国人はみなスパイだ」として監視の目を光らせており、マライーニも身辺に監視の目が迫っていることを感じていた。

1943（昭和18）年9月、イタリアが連合国に降伏すると、一転して同盟国から敵国人となった。マライーニ一家は、レーン夫妻とは違って懲役刑を科されたわけではなかったが、敵国者として名古屋の「強制収容所」に収容された。

収容所に閉じ込められたイタリア人16人は、苦痛、飢餓、虐待に対して抗議のハンスト（食事を拒否し抗議）を行った。そのうえマライーニは特高の前で指を切り落し、これを特高に投げて「イタリア人は嘘

つきではない」と叫んだ。

いったん敵国人となると、スパイ冤罪のレーン夫妻らと同じような弾圧を受けたのだ。

マライーニは日本が敗戦となった後の1946（昭和21）年にイタリアに帰国したが、1953（昭和28）年、日本の文化映画制作取材のために再び来日した。

苦難の体験を強いられた日本だったが、日本への偏見を持たず、むしろ親愛の念は戦前よりも深まっていたという。

日本との関係では、1970（昭和45）年の大阪万博では、イタリア館の副館長を務め、1972（昭和47）年札幌・冬季オリンピックの際には、イタリア選手団役員として参加し、日本通のイタリア人として活動した。

この間、1958（昭和33）年2月、イタリア山岳会会長からカラム登山隊への参加要請を受けたマライーニは登山許可取得に奔走したが、希望する峰々は既に他隊に許可されていた。それでも申請を続け、ようやくガッシュヤールム4峰（7080m）の許可を得、自らも登山隊員の一人として参加。さらに1959（昭和34）年には登山隊長としてサラグラール（7350m）に初登頂した。

マライーニは2004（平成16）年イタリア・フィレンツェで91歳で亡くなった。

宮澤弘幸が北大生のころ、妹のように可愛がったマライーニの娘・ダーチャはイタリア文学界で知られた作家である。

事件を最初に世界へ伝えた

私は、「宮澤・レーン事件」を冤罪として告発し続けた上田誠吉弁護士とも何度か会っている。

最後は1997(平成9)年2月22日に、宮澤弘幸の五十回忌に合わせた「秋間浩さんを偲ぶ会」が宮澤家の菩提寺である東京・新宿の常圓寺で行われた時だった。

その時、上田弁護士は私にも「山野井さん、宮澤事件は決して忘れてはならないことです。今度じっくり話し合いましよう」と語った。この連載を引き受けたのも上田弁護士がこのひとことがあったからだ。

上田弁護士はマライーニについて書いている。同弁護士の著書『人間の絆を求めて―国家秘密法の周辺』(1988年11月・昭和63年7月・花伝社刊)から紹介する。

1987(昭和62)年秋、上田弁護士夫妻は、アメリカ・コロラド州ボルダー市の秋間夫妻を訪れ、一緒にボルダーの商店街を楽しんでいた。その時、古本屋をのぞいていた秋間浩さんが突然「マライーニさんの本があります」と声を上げた。

この町でマライーニの本に出合う偶然に4人は驚いた。

本の題名は『ミーティング・ウイズ・ジヤパン』(原題『オレ・ジャポネジ』の英訳刊)

マライーニはこの序文の中で、次のような宮澤弘幸への献辞を書いている。

「私は、宮澤弘幸の名を落とすわけにはいかない。彼は私のもっとも親しい日本の友人の一人です。また登山と研究の仲間であつたが、日本の軍国主義体制の、愚かしい、そして捉えようのない残酷さのために、その短い命を落したのであつた。弘幸は、世界に向かって偉大な価値をもつ日本人の心のもっとも高貴な一面を代表していた。今日の西欧の我々よりは古代ギリシヤ人達がいにより深く理解することができるような、美というものに対する鋭い感受性、その人生に対する情熱的な取り組み方、人間に対するだけでなく、チベット人のいうように「心あるもの」も「心のないもの」も、すべてのものごとに対する深い親愛感などがそれである。そして日本人の性格の中にひそむもう一つの側面、それは何百年にもわたつてその美質と相いれないなかつた、粗野で暴力的で、そして蒙昧な側面が宮澤に對しておそいかかつたのであつた。私は弘幸の事件を支配したのが、この日本人のもつ後者の側面であつたということが、不条理な運命のもたらした悲惨であつたことを希むものである」

続けて上田弁護士は「このイタリアの碩学が、不幸な日本の旧友に對して、早くも1957(昭和32)年に最大級の賛辞を呈していたことを知って、私は心温まる思いがした。そして同時に、故宮澤弘幸の悲惨な事件を最初に世界にひろく伝えたのは、ほかならぬマライーニだった」と書いている。

衰弱した宮澤弘幸と再会

マライーニは、1946(昭和21)年1月に宮澤弘幸と再会した時の様子を同著で次のように書いている。

戦後の宮澤弘幸の言動を描いた文章は、母親・とくの遺した手記を除くと、このマライーニの叙述以外にはないという。文中「ヒロ」とは宮澤弘幸のことである。

「収容所から保釈されたあと私はアメリカ軍に雇われて、アメリカ軍に就職しようとする日本人求職者と面接する仕事に携わっていた。アメリカ軍の給料は高かつたので求職者はいつも長い列をつくっていた。ある1月の寒い朝、私が事務所の椅子に座っていると、ドアのところろに一人の老人の影を見たように思った。私がもう一度見なおすと、影は私に挨拶してきた。そのとき私はこの人の姿になにか親しいものを感じたが、しかしどこかが変わり過ぎていて、私には理解できなかつた。その人は遠慮勝

ちに私の前に来て、そして小さな声で「あなたにはマライーニさんですか」「はい、あなたはどうなただですか」「影の人は、周囲に気をつかいながらいった。

「お仕事の邪魔になってはいけません。あとで外でお待ちします。私はヒロです」

「ヒロ！ヒロ！」私は不意を打たれて彼の名前を繰り返すことしかできなかった。なんと変わり果ててしまったのか。彼はまだ23歳か24歳か（注26歳が正しい）でしかなかったはずなのに50歳台の人のように見えた。彼には歯がなく、黄色い肌をして、そしてむくんでいた。それは太陽から隔離されて、ながく刑務所に拘禁されていた人に特有のものであった。……彼は知識へのあくなき渴望を持ちそのうえ登山家であった。彼は私が北海道で得た最初の友人の一人でありこの北のはずれの地までしばしば冬山やスキーを共にした仲間であった。このように魂の抜けた様な状態が彼の身に起ろうとは……」

マライーニは宮澤弘幸を近くの喫茶店に誘った。宮澤弘幸は「生きて帰れるとは思わなかった」と、4年間の拘禁生活の飢餓と極寒のひどい仕打ちについて語った。

マライーニは、結核を患い長く生きられないことを宮澤弘幸は知っていたようだと感じた。

マライーニは「正式に裁判を受けたのか」

と尋ねたが、宮澤弘幸は「裁判は受けたがそれは茶番だった」と答えた。

「翌日、政治的訴追の犠牲者の問題を扱う事務所のアメリカ軍の責任者のところに連れていった。弘幸の申し出は温かく受けられ、弘幸が再出発できるように、更に適切な医療が受けられるように、補償金を得るよう努力したが、間もなく宮澤は咯血し亡くなった」

マライーニは「彼は軍国主義による専制のもう一人の犠牲者であり、そして正確かに彼にふさわしい謙虚な、そして静かなやり方における勇者であった」と結んでいる。マライーニは間もなく帰国したが1954（昭和29）年に再び来日し、宮澤弘幸の母親・とくと東京・新宿の常圓寺で弘幸の墓に手を合わせた。

◇ 著書『ミーツイング・ウィズ・ジャパン』で宮澤弘幸を讃えてから37年経た後の1993（平成5）年12月に制作されたビデオ『レーン・宮澤事件—もうひとつの12月8日』の中でも、マライーニは次のように語っている。

「彼（宮澤）は英語が上手でフランス語も習っていた。宮澤君もレーン夫妻も良く知っていた。決してスパイではなかったです。両方とも政治関係はなかったです。レーン夫妻は大変強い深いクエーカー教徒で

した。宮澤君は強い愛国者だった。南京事件の話になって家で（虐殺の資料を）見せたら、彼は「これは嘘だ。プロパガンダだ」と怒ったんですね」。

日中戦争の影が重苦しくなってくる時勢にあっても、工学部学生として、外国人との交流を重ね、軍隊とも真つ正面から向き合い、将来は海軍の技術将校になることを目指していた愛国青年・宮澤弘幸の青春が浮かび上がってくる。

◇ 釈放後、宮澤弘幸に会ったマライーニは、「私たちは抱き合って泣きました。今でも……本当に恐ろしかった。栄養不良で顔がむくんでいた。歯がなくなっていた、髪もなくなっていた、恐ろしいことだ」と絶句しながら語っている。

◇ 宮澤弘幸が1945（昭和20）年10月に釈放されて1947（昭和22）年2月に命を落すまでに会った北大関係者はマライーニただ一人であった。

宮澤弘幸は釈放された後も北大に対して強い怒り、不信を抱いていたことは間違いない。なぜなら両親が北大総長から受けた仕打ちを聞いていたであろうし、検査され勾留された状態で退学願を「書かされ」、釈放後の復学手続きも形ばかりであったと、私は思っているからだ。

北大は、宮澤弘幸が事実上獄死してから66年経った今、「スパイ」とされた事件が冤罪であることが明らかになっているにも関わらず、北大がとった学問の府にあるまじき対応を謝罪しようとしていない。今からでも遅くはない。北大は今なお「スパイの家族」として苦悩している宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんに謝罪すべきだ。フォスコ・マラーイーニと宮澤弘幸の青春もまた、戦争によって引き裂かれたのである。

【注】『ミーティング・ウイズ・ジャパン』は原題（イタリア語）が『オレ・ジャポネジ』で、日本語訳『随筆日本』（松籟社刊）が出ているが、当時はまだ把握されておらず、本稿での引用部分は、上田誠吉著の中の上田訳によっている。「茶番」など意識もみられる。

第五回

宮澤弘幸「スパイ断罪」

は冤罪である

内閣総理大臣・安倍晋三が「安全だ」といって海外へ売っている「原発」がほとんど安全検査の行われていない輸出であるこ

とが新聞で報道された。また東京オリンピック招致では「放射能汚染は完全にブロックされている」と嘘をついている。さらに「福島は東京から200キロも離れている」といって、いまだに自分の家に戻れない福島の人たちを逆なでし、置き去りにしている。そして「オリンピック東京開催」に日本中は万歳して大騒ぎした。

日本は、先の戦争で対戦国だけでなく多くの人たちの命を奪った。広島と長崎に落とされた原爆で一瞬にして数十万人の命を失っている。そして二年前の「原発事故」さえ忘れてしまう国民なのか。

しかし決して忘れてはいけないことがある。戦争終結後68年経ったいまも「スパイの家族として」悲しい辛い人生を歩んでいる人がいる。

2013（平成25）年10月15日に開かれた臨時国会で安倍政権は「特定秘密保護法」の上程を進めている。政権与党の公明党も少し中身を変えさせただけで賛成の意向を明らかにしている。

宮澤弘幸らを一齐検挙した「軍機保護法」が、当時の議会で抜本改定論議された時、暴走に歯止めをかける付帯決議や軍・政府による答弁がいくつも残されたが、改定成立後はすべて無視された。

私はこれまで4回にわたって「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」による悲劇を書い

てきた。この大本である軍機保護法の再来である「特定秘密保護法」が成立すれば、宮澤弘幸とその家族やレーン夫妻らを襲ったのと同じ悲しみと苦しみ、あなたとあなたの家族に、私と私たちの家族の身に起きる。

それが「特定秘密保護法」だ。だから法案の中身が少し手直しされたとしても本質は変わらず、国民の目を耳を口をふさいで、宮澤弘幸に懲役15年を科して網走刑務所に閉じ込めた、あの「悪法」と全く変わらない。

宮澤弘幸は戦後、GHQ（連合国軍総司令部）による超法規措置によって釈放されたあと、再会した岳父（前回記述）マラーイーニに対し「裁判は茶番だった」と語ったという。そして、その後伏した死の床にあつて「北海道で何があったのかをあらいだらい書く」と言いつつ、27歳の若さで命を落とした。落としたというよりは奪われたのである。

旺盛な好奇心に監視の目

北海道帝国大学の学生、宮澤弘幸がなぜ検挙され、懲役15年の刑を科され、極寒の網走刑務所に投獄されたのか……。

宮澤弘幸は好奇心旺盛で、機会があれば何でも見聞きし、どこにでも出かけた。軍主催の軍事講習等にも積極的に参加した。

旧満州（現・中国東北部）にも出かけた。これらでの見聞の多くは『北海道帝國大学新聞』や『北海タイムス』（現・『北海道新聞』の前身の一つ）、などに掲載されている。

山登りが好きな宮澤弘幸は、北大に席をおく研究者であり登山家でもあるイタリア人マライーニと共に北海道だけでなく本州の穂高などにも登り、さらに、二人は自転車で北海道を駆け巡った。こんなオープンな青年がなぜスパイなのか

私たちは旅行をすれば、そこでの見聞や体験を屈託なく話す。これは日常生活であたりまえのことだ。だが「外国人を見たら“スパイ”だと思え」と叩き込まれた人たちの目には違つて見えるのだ。

外国人教師と北大生の交流の場であった「心の会」が特高警察に目をつけられたのは、当時9歳だった私にも分かる。「壁に耳あり障子に目あり」と小学校でも教えこまれ、街中の電柱等に「外国人はみなスパイ」のポスターが貼られていた異常な時代だった。

この事件が冤罪であることは全貌を調べた故上田誠吉弁護士らによつて外郭が明らかにされている。そして北海道大学も、2012（平成24）年10月24日に同大を訪れた宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんに對し、当時の新田副学長は、上田弁護士の調査を

引いて「冤罪であることはすでに明らかにされている」と言明している。私ともう一人の会の代表・山本玉樹もこの席に同席した。

NHKテレビや新聞各社も取材していた場所で「冤罪」を認めながら、北大はいまだに宮澤弘幸らへも、遺族である86歳の秋間美江子さんにも謝罪していない。

私が代表を務める「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」が、この事件の真相を広く知ってもらうための二冊のパンフを作った。『スパイ冤罪 宮澤・

レーン事件 真相を知ってほしい』（A5版112頁）と『宮澤・レーン事件 冤罪の構図 一番・大審院判決の条条検証と批判』（B5版130頁）を読めば、この事件が裁判所ぐるみの国家権力によつて仕組まれた冤罪であることがよくわかる。

この事件の捜査・裁判記録は大審院判決などごく一部を除いてほとんどが終戦時に廃棄された。8月14日の閣議で外交文書を含むすべてを廃棄することを決定、同18日には市町村にも通達された。

「外務省の裏庭では三日三晩煙が絶えなかった」とも伝えられている。役人は自分の身を守る時にはこのように記録を廃棄した。

三日三晩煙が絶えなかったのは地方の役所でも同じだった。多くの命を奪った記録

は真夏の太陽をも覆った。そして事実も消し去った。

だが思わぬところで廃棄を免れた資料もある。旧内務省の警保局外事課が内部資料として編集した「厳秘 外事月報 昭和十八年二月分」の中に一審判決の主要部分が書き写されて収録されていた。これは上田弁護士が収集した資料の中にはなかった新たな発見であり、事件の構図を掘り起こすうえで大きな手がかりとなる。以下は、これらの文献をもとに検証してみた。

これが「スパイ」の容疑

戦後の1994年（平成6）、事件から半世紀にして発見された札幌地方裁判所の判決文（写し）によると、北大生・宮澤弘幸がスパイと断じられた事柄は、

- ① 大学の幹旋による夏季労働実習で行った旧樺太（現ロシア領サハリン）大泊町の海軍工事現場で見たたり聞いたりしたこと
- ② 同現場の係員から紹介されて訪れた樺太・上敷香の海軍飛行場の工事現場で見聞したこと
- ③ 札幌通信局長の幹旋で便乗した灯台船で巡航した樺太および千島列島の灯台などで見聞したこと
- ④ 樺太の海軍大湊要港部が催した軍事思想普及講習会に参加して学び知っ

たこと

⑤ 陸軍の千葉戦車学校での機械化訓練講習会に参加して学び知ったこと

⑥ 満支方面（現・中国の東北部および中国中央部）を旅行した折に見聞したこと

——などで、これらを探知、あるいは知得し、レーン夫妻に漏泄したと決めつけて軍機保護法違反と断じている。

しかし、①は文部省が行った「学生勤勞奉仕隊」の一環であり、学友数名と共に行ったもので、全員が同じ見聞をしているのに、宮澤弘幸以外は検挙もされていない。

②は、かねて関心のあった先住少数民族を国策で一か所に集めた殖民集落「オタスの杜」を見学するために行ったのが一番の目的。

③は、札幌通信局長が宮澤弘幸の父とかねて知り合いだったことから実現し、北大からの推薦も受けて便乗したもの。

④は、おそらく国を守る気概から申し込んだもので、当然に、厳しく身元調査がなされたに違いない。

⑤は、同じく陸軍が催し陸軍が参加を認めたもの。

ちなみに宮澤弘幸はこのあと海軍委託学生試験を受けて合格（月45円の手当て支給）しているから、陸海軍の両体験を経て海軍に親近感をもったのだろう。卒業後は

海軍の技術将校を目指していた。

⑥は、国策会社「南満州鉄道」が公募した学生論文に入选し、その褒賞として招かれた「満鉄招聘学生満州調査団」の一員としてのもの。また海軍委託学生として便乗を許されて軍艦に乗って上海まで航海したおりの中国旅行等だった。

このように宮澤弘幸の行動はすべて正々堂々のものであり、スパイの影など微塵もない。

判決自体も、その動機を「夫妻の歓心を購はんが為」という、重罪を科すにはまるでそぐわない次元に止めざるを得ない判示になっている。

誰の目にもスパイとは見えない一番明らかな事例は、③の中の一例にされた「北海道根室にある海軍飛行場」の存在だ。

この飛行場は、世界航空史で名高いリンドバーグが1931年（昭和6年）に水上機で北太平洋を横断し、根室港に飛来した翌年に造られたもので、その後新聞記事にも載り、公然周知の存在だった。

米国海軍武官に案内

さらに驚く資料も見つかった。

1934年（昭和9年）8月4日付で、海軍大湊要港部が北海道庁根室支庁らに対し、米国海軍武官の「根室飛行場見学」に適切な便宜をはかるよう求める通知を出し

ていた。

宮澤弘幸が検挙される7年前に米国の海軍武官二人を「丁重」にお迎えし、ご案内するように通知されていたのである。

しかも、大審院判決の中に引用されている「上告趣意書」によると、宮澤弘幸が根室飛行場の一件を知ったのは、灯台船を降りて札幌に帰る列車の中で、たまたま乗り合わせた人が問わず語りに話したのを聞いたに過ぎず、この経緯を判決も否定してはいない。

従って、これをもって「根室飛行場の存在」が秘密であって、これを探知して漏泄したと断じるのは、こじつけでありデッチあげだ。公然周知の飛行場も軍が「秘密だ」と言えば「秘密」なのだ。

軍機保護法は1899年（明治32年）に公布された古い法律だったが、盧溝橋事件の起きた1937年（昭和12年）に、新法と云える内容に抜本改定された。

このときの議会審議で多くの時間をさいたのは、誰が「秘密」と決めるのか、その「秘密」の範囲をどこまでとするか、さらに適用する範囲をどこまでとするか、という歯止めの議論だった。

これに対して軍および司法当局は繰り返して「秘密の決定は陸海軍大臣が省令を以て行うが、その秘密は軍の最高指揮にかかわる高度のものであり、不正不法の手段でな

ければ探知し得ないものであり、これを不正不法な手段によって探知し漏泄した者だけを罰する」という趣旨の答弁を行い、それらを基にして

「本法に於て保護する軍事上の秘密とは、不法の手段に依るに非ざれば之を探知収集することを得ざる高度の秘密なるを以て、政府は本法の運用に当たりては須く軍事上の秘密なることを知りて是を侵害する者のみに適用すべし」(原文は旧仮名遣いの片仮名表記)

——という付帯決議をつけることによって可決成立させた。

無視された「歯止め」

ところが、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」をみれば、これら歯止めがすべて無視され、国民を取締る悪法として独り歩きしていることが明らかになる。

秘密の範囲が、公然周知の根室飛行場にみられるように、とても「高度」とは言えないものにまで押し広げられ、列車の中で乗り合わせた人が問わず語りに話したのを聞いた」という、全く不正不法の手段を伴わない行為にまで罰の対象を押し広げている。これだけでも、「事件」が国家によって仕組まれた冤罪であったと証明することが出来る。

一斉検挙によって宮澤弘幸と同じ日に検

挙された北大英語教師のレーン夫妻は、敬虔なキリスト教徒であり、中でも夫のハロルドは戒律に厳しいクエーカー教徒として「いかなる理由、事情があれば、人が人を殺すことはできないし、加担もできない」と、第一次世界大戦のおりには「良心に基づく兵役拒否」の制度を使い、所定の社会奉仕を勤めることで兵役を忌避した。このことを考えてもハロルドが人を殺し合う戦争のためにスパイ行為を行うはずがないことは明白である。

このようになんらやましいことのない人間を罪人に仕立てるのは拷問しかない。暗黒警察の密室の中で行われた拷問を個別に証明することは難しいが、作家・小林多喜二が取調べ中に殺害されたように、生死にもかかわる。このため、宮澤弘幸の弁護士・斎藤忠雄も、形だけでも容疑を認めるよう説得したほどだ。

こうして起訴され、裁判に付された「事件」は、拷問による自供調書の他には何の客観的証拠も証言も提示されていない。従って有罪と断じた判決文にも「犯罪」を証明する論証すらなく、「秘密」を「探知」するにあたって不正不法の行為があったとの判示もない。一言でいえば、一方的に容疑を並べた起訴状と同じ判決文があるだけである。

そのうえ裁判はすべて非公開で行われた。

「秘密」が傍聴人らによって外に漏れるのを防ぐためとされ、また戦時特例法によって、弁護権も制限され、手続きも端折られ、判決の内容さえ被告人らに周知徹底されなかったと推定される。

控訴審も同じ特例法によって省略され、上告された大審院も検事の意見を聞いただけで、公判を開くことなく書面審理で「棄却」と断じている。まさに宮澤弘幸が言う「茶番」であり「暗黒裁判」だった。

もし上田誠吉弁護士がいまも存命だったら「再審」に踏み切っただろうと私は考える。

秘密保護法は丸ごと阻止を

いま国会に上程されようとしている「特定秘密保護法」はまさに軍機保護法の焼き直しであり、それは安倍政権が進めている憲法改悪——戦争放棄の「9条」を改悪することと深くかかわっている。先の戦争で宮澤弘幸等が「スパイ嫌疑」で捕らえられることによって「見ざる聞かざる言わざる」の世の中に変えられていったのと何ら変わらない。

法律とは時の権力者によってどのようなでも運用されてしまう。時には「憲法」もだ。日本国憲法は「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と明記しているにもかかわらず、日本の軍事力は世界17位

にランクされている。自民党をはじめ憲法改定論者は「実態に即した憲法に」といい、まさにその実態づくりを走っている。それが政治家のやり方だ。

東京大空襲で家族を失いそれを訴えた「ガラスのうさぎ」(220万部)の著者高木敏子さんは、秋間美江子さんと私の共通の知人だ。この三人が会った時の二人の言葉は私は忘れない。

高木敏子さんは「もし憲法9条改悪が国会に上程されるようなことがあったら私は家族が反対しても国会に座りこむ」と語り、秋間美江子さんは「私のような苦しい悲しい家族を二度と繰り返してはいけません。そのためには何度でも日本に来ます。街頭にも立ちます」と語っている。

今は集まることも、話す事も、書く事も自由だ。この時こそ「戦争は嫌だ」「特定秘密保護法」反対を叫びたい。自由に山の頂に立つためにも。

【注】本稿は「特定秘密保護法」が安倍政権与党の自民・公明両党による強行採決によって2013(平成25)年12月6日に可決される前に執筆した。

第六回

登山・スポーツを否定する戦争への道を許すまい

最終回は、「戦争と登山・スポーツ」について、私の思うところを記したい。なぜなら、登山情報誌である本誌が72年前の「スパイ冤罪事件」を連載することに違和感を持った読者がいらつしやると聞いたからだ。この連載を準備していた頃、「秘密保全法」(当時の呼称)の法案化が画策されていた。そして2013(平成25)年10月15日開会の臨時国会で正体を露わにした「特定秘密保護法」は、岳人・宮澤弘幸が検挙された「軍機保護法」と弾圧法規である治安維持法を上回る国民の耳、眼、口をふさぐ悪法であることが暴露され、ジャーナリスト、法律家、作家、労働組合など広範な人々と団体が、「断固廃案に」と立ち上がった。宮澤弘幸の家族でただ一人残された妹・秋間美江子さん(86歳)は、新聞、テレビの取材で「日本の皆さん、二度と私たち家族が経験した苦しみを繰り返してはなりません。『秘密保護法』に反対してください」とアメリカ・コロラド州ボルダーから訴えた。

連載の第一回で「軍靴の靴音が近づいてきた」と書いたが、この半年で「軍靴」はすぐ後ろにまで迫ってきた。登山・スポーツを誰からも干渉されずに楽しむことが出来る平和な世の中であってほしいと願い、連載のまとめとしたい。

岳人精神を貫いた宮澤弘幸

宮澤弘幸は「何でも見てやろう、何でもやってみよう」という知的好奇心旺盛な青年だった。

比較的恵まれた家庭環境で育ち、幼少から弟妹と英語の個人教育を受け、府立六中(現新宿高校)では、5年間皆勤、器械体操、水泳が得意で柔道初段。

1937(昭12)年、北海道帝国大学予科に合格して札幌へ。その直後の7月、日中戦争(盧溝橋事件)へ突入、翌年四月には国家総動員法制定と一気に戦時色が高まった。しかし宮澤弘幸は勉学とスポーツに生き生きとした挑戦を続けた。

1938(昭和13)年、生涯一番の理解者となるフオスコ・マライニーが北大医学部の助手に就いて以降は、一緒に雪小屋(イグルー)実験、自転車で北海道日高・二風谷のアイヌ集落などの旅行、日本アルプス穂高・槍登山などに行った。

また同時期、満鉄招聘満州調査団の一名として旧満州(現中国東北部)を旅行し、

千葉県習志野の陸軍戦車学校の機械化訓練講習会に参加し、海軍委託学生の試験に合格し、海軍から月45円の手当をもらった。通信省の灯台船「羅州丸」に便乗して千島列島・樺太巡りにも行った。

文武両道にわたって青春を謳歌した宮澤弘幸の北海道での日々はどこに日本という国に不信を持つ邪悪なスパイ心が潜んでいるというのだろうか。マライニーとの交友がもつと進んでいたなら、宮澤は優れた岳人として名を残していたに違いない。

オリンピックと政治・戦争

平和の象徴としてのオリンピックも政治と戦争と決して無関係ではない。1936（昭和11）年の第11回ベルリン・オリンピックは、それまでの都市主催から一転し、ドイツの独裁者ヒトラーは国家主催として開催し、ナチス宣伝、戦意高揚の場として最大限に利用した。

次いで1940年（昭和15年）の第12回は日本の東京で開催されることになった。しかし日中戦争のため、軍部の開催反対で日本が返上して中止、第13回のロンドンは、第2次世界大戦で中止となった。

戦後の第14回オリンピックはロンドンで開かれた。しかし1980（昭和55）年の第22回モスクワ・オリンピックは、ソ連のアフガニスタン侵攻に反発した多くの国

がボイコットし、日本も参加しなかった。モスクワを目指していた柔道の山下泰裕、マラソンの瀬古利彦など多くの若者の夢が奪われた。2020年オリンピック東京開催招致にあたって安倍首相は「放射能汚染水はブロックされている」と大見えを切ったが、今も「放射能」は垂れ流しだ。

一方、臨時国会では、国家安全保障会議設置法案とセットで秘密保護法案を成立させようとしている。その先には、集団自衛権行使を明確化し、さらに憲法を改悪しようという画策し、戦争する国へ一歩二歩と近づけようとしている。

戦争をする国にしようとしている安倍首相に、オリンピックを招致する資格があるだろうか。自衛隊を国防軍にして、地球の裏側まで派遣すると公言し、もし実際にアメリカの手先となって戦争に参加する日本になったとすれば、東京オリンピックをボイコットする国が出る可能性もあるのだ。東京オリンピックは平和でなければ開催も成功もしない。だからこそ、スポーツを愛する人々は、何よりも戦争と戦争へ繋がる道に対しては、敏感でなければならぬと思うのだ。

過ちを繰り返してはならない

登山でも例外でない。先の戦争でヒマラヤ登山はもちろん国内の登山もほとんど禁

止された。西本武志・労山会長の著書『十五年戦争下の登山―研究ノート』によれば、戦争は登山を愛する多くの登山家、学生、社会人を戦場に引きずり込み、いのちを奪った。さらに登山界の指導的立場の人達と組織が戦争に加担したことが明らかにされている。

先の戦争では、作家も画家もすべてが天皇のために、お国のためにと協力させられた。問題は戦後、これらの人たちが戦争に加担したことに口を拭ってそれぞれの分野で指導的立場にいたことである。大事なことは過ちを反省し糾すことだ。

同じ敗戦国であるドイツは、戦後ナチスの国旗・国歌を廃棄し、1985（昭和60）年5月8日、ヴァイツゼッカー大統領はドイツの敗戦40周年にあたって連邦議会で「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる」と演説した。そして今も「戦争犯罪人には時効はない」としてナチスを追及し処罰している。こうした自国の誤った歴史を謙虚に反省している姿勢が、ヨーロッパのかつての敵国から信頼を得ているのだ。

翻って日本はどうか。開戦時に東条内閣の商工大臣であり、戦後A級戦犯とされた岸信介は復権して総理大臣にまでなった。今その孫・安倍晋三首相は嘘をついてオリンピックを招致し、再び戦争への道を画策しているのだ。そして国民に「君が代」日

の丸」を強要し、隣国である中韓両国から歴史認識を問われるというありさまなのである。

登山・スポーツを否定する戦争への道は、絶対に許してはならない。

映画「アイガー北壁」を観て

2010（平成22）年4月に日本で公開されたドイツ映画『アイガー北壁』（2008年制作）を観て、私は、死に直面する登山家の映像とともに、ナチス政権がスポーツを政権維持のために利用したことの方に、改めて関心を持った。

『アイガー北壁』は、ベルリン・オリンピック直前の1936（昭和11）年の夏、ナチス政権の威信を示すために、未踏のアイガー北壁にドイツ人登山家が初登頂することを求め、登頂に成功した登山家には、オリンピック「金メダル」を与えると呼び掛けたことをテーマにした山岳映画だ。

ナチス政権の呼びかけに多くの国から登山家がアイガー北壁に押し寄せた。ナチス嫌いの2人の兵士（登山家）と、ナチス党員の登山家2人の二組が北壁に挑戦した。その4人は雪崩、吹雪、強風の中で過酷な闘いを繰り広げた。

一方、金持ちと政治家、そして新聞記者たちは、夜は麓の豪華なホテルで食事し、

ダンスに興じ、昼間はホテルのテラスから望遠鏡で2組の登山家の登攀競争を眺めていた。

ナチス政権の政治的野望に巻き込まれた登山だったが、困難の中で相手方の登山家を救うため、吹雪と零下数十度のなかで4人は身を寄せ合いながらなんとか生きようとした。そこにはナチス政権の思惑はなく、困難を乗り越える登山家としての仲間精神があった。そして次々にいのちを落していった。

「登山だって政治（国のため）とは無関係ではない」というナチス政権の政治家。

「栄光（登頂）か悲劇（死）でなければ記事にはならない」と冷やかに語る新聞社の幹部。

困難に挑戦する登山家を描くとともに、登山を自己の目的のために、最大限に利用した政治家と新聞を告発した映画だと私は受けとめた。

いま、新聞社とテレビ局は、駅伝、マラソン、高校野球、ラグビー、サッカーと多岐にわたってスポーツを支援している。そのほとんどは戦争で中断された歴史をもっている。

再びこうしたスポーツが中断しないことを祈りたい。そのためには二度と戦争をしないことだ。

新聞はかつて戦争に加担した苦い歴史を

持つ。新聞社・テレビ局は、単に企業イメージのアップや、販売部数拡張・視聴率アップの手段とするのではなく、「スポーツを育成するとともに、平和を大事にする」役割を果たす先頭に立つべきだ。

戦中のスポーツ・登山

日本の古来スポーツの代表的なものに剣道と柔道がある。野球をはじめスポーツの多くは外国からのものだが、剣道と柔道は日本古来のスポーツとして奨励され、日中戦争―太平洋戦争中は、国民の精神向上運動としての一翼も担われた。

中学から大学では、人殺しの武術である「銃剣術」も必修科目で、この完全実施を監視するために、学校には軍隊の「将校」が配属された。今でこそ、柔道・剣道は、日本古来の伝統スポーツとして位置づけられているが、当時は、まさに戦争に勝つための武道であり、精神教育としての「皇国武道」だった。

日本の登山の歴史の中で、登山も戦争に巻き込まれた。太平洋戦争が始まると、大学生は軍需工場に動員されるか、学徒出陣で戦場に駆り出された。スポーツで身体が鍛えられた多くの学生たちは真っ先に戦場に送られて戦死し、二度と山に登ることはなかった。

太平洋戦争時代、「贅沢は敵だ」「欲しが

りません、勝つまでは「パーマネントはやめませう」「足りぬ足りぬは工夫が足りぬ」との官製スローガンが、国民を戦争協力と耐乏生活に追い込んだ。登山も贅沢の対象となり、抑圧された。

1945(昭和20)年、終戦を迎えて学園に戻った若者によって、山岳部をはじめ、さまざまなクラブ活動が次々と再開された。また登山は働く若者たちにとっても、魅力的な活動として急速に広がった。今のような週休2日制とか大型連休とは全く縁遠い時代だったが、多くの若者たちは登山を楽しんだ。

休みが日曜日1日だけの若者たちは、土曜の夜行列車で中央線沿線とか上越の山に出かけた。新宿駅、上野駅のホームは大きなリュックを背負った若者があふれていた。夜行日帰り登山だ。そして月曜にはまた元気に勤めに出かけたものだった。

働く若者たちの登山熱が高まる中で、1960(昭和35)年に、勤労者のための「日本勤労者山岳連盟」が、「スポーツは文化であり、国民の権利である」と宣言して、設立された。

5項目の「指針」の最初には「登山は、人類が創造したすぐれた文化であり、自由と平和、ヒューマニズムとフェアプレーの精神を生命とするスポーツである。登山はあらゆる種類の暴力や大量殺戮、自然を

根底から破壊する戦争とは無縁でなければならぬ。この見地に立った登山運動は諸国民の間の好ましい交流を促し世界平和に貢献する」とある。

私が尾瀬の「燧岳」や、山梨の「三つ峠」などに出かけたのもこの時期だった。2010(平成22)年、「労山」は創立50周年を迎えた。この記念行事であらためて「平和」を確認した。

世界のスポーツ環境にも目を

日本では登山をはじめさまざまなスポーツが全盛だ。しかし今のヒマラヤは、安心して登山が出来る状態ではない。ネパールのカトマンズの街角には銃を構えた兵士が立ち、パキスタンのカラコルムの山々でもインドとの国境近くでは絶えず大砲がなり響いていると聞く。

さらにパキスタンの一部ではアルカイダ討伐の名目で銃声が絶えることがない。最近の報道ではアメリカ軍の無人機が大勢の一般の人たちの命を奪っている。無人機は、遠隔地にいる兵士によってコンピュータ画面の上で操作されている。恐ろしくなる。

パキスタン北西辺近郊の難民キャンプには戦火を逃れてきた約130万人が暮らしている。国内の民族紛争で登山隊が入国出来ない

い事もある。

こうして振り返ってみると、「戦争とスポーツ」「平和とスポーツ」は、常に真剣に考え、立ち向かうべきテーマであることを再認識する。

『アイガー北壁』鑑賞を機会に、登山をはじめ、スポーツをする自由と権利を守ることが、戦争に反対し平和を守る闘いであることを訴えたいと考えた。

11月中旬、息子・泰史は久しぶりにわが家に泊まった。翌早朝、韓国に出发するためだ。今回の韓国行きは何かの賞にノミネートされているためらしい。本人はもとより賞には関心はない。久々に韓国の友人たちとのクライミングが楽しみのようだ。

春のアンデスやヒマラヤと多くの外国の山に登って来た息子は一番「平和」を感じていると思う。



日本勤労者山岳連盟がこの連載の機会を与えてくださったことに、心から感謝します。また西本武志会長の著書『十五年戦争下の登山―研究ノート』を参考にさせていただきました。『登山』が発足時の「指針」を大事にして、ますます発展することを期待しています。ありがとうございます。